

滋賀県立近代美術館協議会(第33回)概要

1 開催日時：平成23年(2011年)8月9日(火) 午前10時00分～12時00分

2 開催場所：滋賀県立近代美術館ワークショップルーム

3 出席者：○滋賀県立近代美術館協議会委員 11名

上野真知子委員 尾崎正明委員 川瀬典子委員 北川邦之委員 北村優子委員
澤野二郎委員 瀬古祐嗣委員 辻喜代治委員 松江仁委員 三原サダ子委員
山添道子委員

○事務局

秋山館長 菊井副館長 伊藤総務課長 占部専門学芸員

宮川管理監(「美の滋賀」発信推進室長事務取扱) 西川文化振興課長

4 会議次第

(1) 滋賀県立近代美術館 秋山館長 あいさつ

(2) 議 事

① 滋賀県立近代美術館の機能と発信力の強化に向けた検討について

② その他

5 概要

(1) 滋賀県立近代美術館の機能と発信力の強化に向けた検討について

【委員】

○議論に入る前に懇話会と各検討委員会との関係を少し整理しておきたいのだが、検討委員会は懇話会の下部機関と解釈していいのか。検討委員会が(案)を作るのか。

【事務局】

○懇話会は3つの検討委員会をつなぐコンセプトを作り、具体的な発信方法等は各検討委員会で行うこととなる。

【委員】

○それでは既に検討委員会での検討が始まっている中、当協議会として何か意見があれば今出してほしいということなのか。抽象的すぎてよくわからないのだが。

【委員】

○資料1「美の滋賀」の発信の資料P1の3つの柱の内、ぱっと見て真ん中の近代美術等の予算が一番少ない。これは、近代美術館の機能発信が先細り、仏教美術とアール・ブリュットが成長していくことなのか。そのバランスはこれでいいのか。

【事務局】

○この数字は、検討会にかかる予算である。アール・ブリュットなどはもっと県民に知らってもらうためのパンフ作成の予算などが計上されている。仏教美術はコンサルタントを入れての

調査も入っている。近代美術館の検討会の捉え方だが、仏教美術やアール・ブリュットの結論がどんなものになるかは分からないが、場合によっては琵琶湖文化館の仏教美術作品を美術館が引き受けることになるかも知れない。また、アール・ブリュットの県の役割としては、美術館の機能無くして成り立たないと考えている。今現在、近代美術館が3本の柱で蓄積してきたものを、さらに発展させ、県民に近いものにしていく、あるいは美の滋賀の発信拠点にしていくかという観点で検討していきたい。

【委員】

- 美術館の現状と課題のところだが、冬期休館はいつから実施しているのか。一定期間休館すると、一般の人からすると美術館は遠い存在になる。その辺も観覧者数減に影響しているのではないか。それともう一つ、県の体制としてアール・ブリュット自身は滋賀県社会福祉事業団だが、今からこの体制を変えるのか。

【事務局】

- 平成20年度、ちょうど県財政が厳しくなり、財政構造改革プログラムを策定する際、県の各部署で予算の縮減が検討され、美術館としてもどんなことができるのかということになり、経費節減のため、年末年始に従来からあった展示替えのための休館期間を延長した。
- アール・ブリュットだが、今のところ棲み分けのようなことをやっていて、現場で見つける、守るあるいは広げるということは、これからも健康福祉部で担っていく。そこで出来た作品を県民に見せる、外に出していくのを「美の滋賀推進室」がやる。発信にしても今唯一あるのは、事業団の近江八幡市にある施設（NO-MA）だけであり、あれでいいのかという議論をしている。県の美術、県民の財産であり、県の美術館で扱い、展示し、収蔵していく必要があるのではないかという議論をしている。その先に、NO-MAと美術館との連携あるいは棲み分けするのか機能分担のことも含めて議論しているところ。

【委員】

- そこで必要となるのは、美術館での専門家をどうするのか、ただ展示の場所だけの議論になっているようだが、これから大きな問題となることを指摘しておきたい。

【委員】

- 琵琶湖文化館だが、今休館されていて先ほど移管とか話されていたが、これでクローズされてしまうのか。建物としては使わないのか。今の移動展示などもやられているようだが、そういう機能も一緒に付いていくのか。

【事務局】

- 琵琶湖文化館そのものをどうするのかの問題は、今仏教美術の検討委員会の議論と切り離されており、検討委員会では、仏教美術の魅力をどのように発信していくのかということと収蔵施設をどこにするのかという2点が検討されている。

【委員】

- ここ近美を収蔵場所として考えた場合、運営上の問題からいえば、人と予算が必要であり、緻密に検討する必要がある。それと、物を移すといっても簡単なものではなく、収蔵庫のスペースはあるのか。

【事務局】

○スペースに全く余裕がないとは言わないが、琵琶湖文化館にあるものをかなり移すとなると全く足りない。さらに、展示となると余裕はない。

【委員】

○検討委員会で検討される際、その辺の検討もお願いしたい。物と予算の手当ては当たりまえで、展示をどうするのか、学芸スペースや資料の保管場所をどうするのかなども是非具体的に検討をお願いしたい。

【事務局】

○資料のp 11にあるとおり、第2回、第3回の検討会でこのあたりのことも検討していくので、参考にさせていただきたい。

【委員】

○滋賀が3本柱の1つとして、アール・ブリュットに力を注がれていることは、ある意味先見性のあることだと認識している。非常に幅広い年齢層からその魅力が受け止められる場所がアール・ブリュットにあると思う。それと、九州のしょうぶ学園の取り組みのように収益の方向で、彼らの作品をデザイン的な要素に組み込み、生活用品への方向に展開していくという、美術館とは少し違うがそういった支援の取り組みもあるのではないかと思う。

【事務局】

○福祉の現場の関係者からは、作品を外に出し、収益を上げ、市場に乗せていくにはどうしたらいいのかという声を聞く。我々としては、美術館やギャラリーでたくさん目に触れる機会を増やすことにより市場化できるのであり、そういった視点も大事にしていきたい。

【委員】

○そういった検討をする際には、専門のデザイン的な視点をもつ人をかませっていくと、こういったものが商品化に向けていいのか参考になると思う。

【委員】

○美術館だけのことで意見を申し上げたい。7/26～31 ギャラリーをお借りして美術教育研究会の「滋賀の子供秀作展」を開催した。同時に五味太郎作品展が開催されており、例年以上に観覧者が多かったと聞いている。また常設展の方も子供たちにも分かるような作品の見方が添えてあって、美術館も工夫されており、それぞれがコラボして、ギャラリーの観覧者が増えたのではないかと感じた。2点目は、そもそも近美は現代アートから出発しており野外彫刻もたくさんある。一方、創設当初に比べると自然も豊かになってきたなという思いがある。そうした中、直島のベネッセアートサイトのように、美術館を中心とした自然を使った野外彫刻などをもっと広げていけないかという思いがある。3点目に郷土の作家を取り上げてほしい。小倉遊亀さんは特設コーナーもあり近代美術館の売りと思うが、例えば東京美術学校卒業後、郷里（蒲生野）に帰り活躍した洋画家野口謙蔵をもっと売り出してほしいと思う。近美には24点もあるのに惜しい。先日東近江市にある記念館に行ってみると、レプリカが展示されていた。館員の話では市からの援助は少なく、閉館の話もあると聞き及びとても寂しい思いがした。滋賀として大切なものは残すべきでもっとバックアップしてほしい。

【委員】

○今の話と関連するのだが、美術館へ来る途中、いつも自然の豊かに感心するのだが、もっと

近くにこうした美術館があればなあと思う一方、あまりにもきれいに整備されており、面白みがないと思った。人間がもっているいろんな表現が出てわくわくするような野外展示のようなものももっとあってもいいのではないか。それと、資料P8にある「地域と人によって支え合っている滋賀の『美』は、美術館と地域がつながって発信していく必要がある」との記述があるが、現在、いろんなところで発信されており、例えば、びわこビエンナーレ、高島の方とか、能登川の町工場など近代美術館以外にも行ってみたいところも最近出てきた。近代美術館を魅力的にするため、そういったところとのつながりをもって発信してほしい。いつも言っているように（湖北からは）気持ちがあってもなかなか足が向かない、ここに資料にアクセスの徹底的な改善とか書かれているが、美術館からもここにとどまらず、学校とかいろんなところに出て行ってほしいと思っている。それと、質問だが、美術館に求められるものとして「創造的な鑑賞者を創出する」と書かれているが、創造的な鑑賞者とは何なのか。

【事務局】

- 鑑賞自体も創造活動の一環だという考え方で、鑑賞と創造とを分けなくて、鑑賞から創造に入っていく人を増やすという意味かと思う。

【委員】

- 「美の滋賀」の発信ということだが、マスコミの立場から申し上げると、知事さんはひとつの施策として「美の滋賀」の発信を一生懸命話されるが、何をどう発信されるのか今一つ伝わってこない。資料P8にもいろいろ書かれているのだが、どのように発信していくのか、もう少し具体的なものがないと近代美術館の観覧者数の回復にどのようにつなげていくのか見えてこない。いろんな課題が山積していると思うが、まずもって足を運んでいただく必要がある。先ほどより、アクセスのことが話題になっているが、美術館は文化ゾーンの中に位置づけられており外から見えない、その中に入って行って初めてここに到着する。それを負としてとらえるのではなく、文化ゾーン全体の集客のコンセプトの中に位置づけていかないと、いつまでたってもアクセスが改善されないのではないかと。また、意義ある広報をどうしていくのか。資料には、何でお知りになりましたかの問いに対して、新聞やテレビなどがあがっているが、そういった部分に予算をかけてどうであったのか検討していく必要がある。それと今はやりの美の発見ツアーなどを旅行社に売り込む際、魅力ある発信には目玉的なものが必要である。例えば、食事やレストランといったファクターも重要な部分である。ここでしか味わえない美のランチなど、滋賀の特徴を生かしたものがほしい。特に、若い人には、アミューズメント的な要素がアートにもあってもいいのではないかと。また、子供たちをどう巻き込んでいき、親御さんに来てもらう手だてなど、いずれにせよ、具体的な集客対策が必要である。一つ方法として、既に当館でもやられたのかもしれないが、本年、琵琶湖博物館のナイトミュージアムが好評であったと聞く、夜の美術館もあってもいいのではないかと。これからのアートには、より多くの人にその存在を知ってもらい、存在意義を高めるためには独自の集客やPRもやっていかなければならないような気がする。

【委員】

- 事前に送付いただいた資料を見ていて、開館してかれこれ30年になるが、私自身、作家として、資料P18の展覧会（県展）やギャラリーを利用させていただいてきたが、県展の観覧者数も見せてもらい、我々も美術館へ来ていただくための声掛けなどをしてきたらどうかという思いがある。その中で是非ともお願いしたいのは、駐車場から美術館までの景色はいいが、高齢化社会の中、美術館まで直接車で来られるようにしてほしいということである。あ

と、ギャラリー部門だが、広さや壁面数が十分でなく、県展も部門を分けてしか開催できないので、展示スペースをもっと広げていただきたい。30年来の希望なのだが、できるものなら、簡易展示場を増設（新設も考慮の上）していただきたい。

【委員】

○滋賀の若い芸術家の活動拠点がほしいということで当館ができたこと記憶しているが、果たして、30年を経過した今、本当に拠点になりえているのだろうかとの思いがある。確かに、制作人口は増えているが、県展でも市展でも50代後半や60代以上がほとんどという現実を眼にする限り、本当に美術はみんなの生活の中で、県民の美の感性を高め、出会いの場あるいは学びの場になりえているのだろうか。2つ目に、公民館などにチラシが置いてあったり、パソコンのHPを使っただけの発信もあるが、時間にゆとりのある人や意欲的に動いている人にはベストでも、そうでない人にとってはきっかけすら掴めない。より幅広い人たちにも発信が届く方法はないだろうか。さらに、人が集まる場に出かけて発信するようなことは考えられないか。将来、美術館に足を運んでもらう子どもたちへの働きかけが大事だが、子どもたちを指導している教員にも積極的にアプローチする必要がある。

また、面積の広い文化ゾーンの一部を利用して、芸術家の創作活動を見学できたり、見学者と作家が交流できるような場づくりができないだろうか。このことは、より広く滋賀の美をアピールできる手だてになると思う。地域で守ってきた美の中で産業から発展して生まれた美にも目を向け滋賀ならではの取り組みがほしい。交通アクセスが良くないのだから、美術館を含めた施設の連携事業やゆっくり過ごせる（時間と空間の）場づくりが必要ではないだろうか。

それと、開館時間だが、昨年デトロイトの美術館に行った時、夜9時まで開館している。職員の勤務時間や予算のこともあると思うが、昼間は来れない人のための柔軟な対応ができないのだろうかと考えている。それと、子どものワークショップだが、夏休み数多く開催されているが、美術館に行けば、何時でも自分でものを作ったりできる体験の場があってもいいのではないかと。何か仕掛けも大事ではないか。

【委員】

○ギャラリーを使わしていただいている団体だが、ギャラリーを使っている団体の会のようなものがあって、この団体からあるいは館といっしょになって、ワークショップの案内など外への発信できないかと考えている。案内状を出してギャラリーへ来てもらうわけで、今まで来たことのない人にとって来館のきっかけにもなる。館の筋を通したPRでなく、それ以外の組織からの発信も考えてほしい。それと、観覧料だが、繰り返し観覧に来るリピーターに対するサービスもあってもいいのではないかと。1996年に「写真が語る戦後の日本」という展覧会があり、いろんな世代の作家の写真をみる機会を得た。展覧会の幅も広げてほしい。

【委員】

○まず、北駐車場から近代美術館へ向かう場合、途中道に迷われている方をよく見かける。最初に池の方に出てしまうと、美術館の建物が分からなくなり迷ってしまうようだ。案内表示の改善（北駐車場から2箇所ある出入口付近に美術館までの道順を分かりやすく示した地図を設置する。さらに、夕照の池を周回する散策路に2箇所程度「→美術館・図書館」と書いた看板を設置する。）をお願いしたい。それと、野外彫刻が話題になっているが、風景にとけこみすぎている部分は特に問題だと思います。それと、若い人の来館に関連して、学校団体の受け入れにあたって館の人員体制が課題となっているが、館にはサポーターもいるので、

そういったシステムを活用していけばよい。また、こうした美術館の人員体制を問題としない団体受入れのシステムづくりは、美術館が早急に対応しなければならない問題の一つであり、館内にとどまらず広い範囲で協力していくことも必要である。人を呼んでくるのに館の人員不足は理由にはならないと思う。さらに、アンケートにあるように近代美術館の存在を知らない人も多い。私の友人からも「近代美術館はどこにあるの。何があるの。」とよく聞かれる。近代美術館に行けば、〇〇が見られるというように、より多くの人にそのイメージを浸透させるように、近代美術館はもっと周囲に対してアピールしなければならない。さらに、展示会の開催だけでなく、近代美術館でしか味わえない、美術館ならではの目玉の土産があればと思っており、ミュージアムショップをもっと目立つようにしてほしいのとともに、取り扱う品目を増やし、魅力的なおみやげづくりも考えてほしい。そうすれば、もっと集客につながるのではないか。

【委員】

- 先ほどより、ワークショップの恒常的な開催や魅力的な土産の開発が出ていたが、そういったところに県内の若い作家を活用したらどうか。私たちの学校でもアンテナショップを運営しており、卒業生の若い作家にいろんな小物を作ってもらい、そこそこ売り上げている。もっと、若い作家を取り込んでいくことができるのではないか。

【委員】

- 最後に私の方から、いくつか行政の方をお願いしたい。通常美術館を作る際には、街中に置くと思う。そうでなければ、その土地になんらかのゆかりや意味があって、郊外に設けるか。安土の博物館や琵琶湖博物館はその例であると思う。滋賀県立近代美術館の設置にあたり、街中から遠く離れた、とりたてて何のつながりのないびわこ文化公園の中に設置したのは、美術館を中核の文化施設にしようとしたことが文化公園の開設当時の発想ではなかったか。しかしながら、この発想は破たんしているのが現状ではないか。びわこ文化公園そのものが十分機能していないことに目を向けることなく、美術館だけを切り取り議論しても結局あまり期待するものが出てこないのではないか。あえて公園の中に美術館を作った意義を今一度確認し、公園自体どうすればいいのか、もっと大きな枠の中で議論しないと解決しないのではないかと思う。アクセスだけでなく、もっと全体的な広がりの中で考えていかないと、その負担を美術館だけに押し付けても解決できる問題ではないのではない。そのへん、元に戻って検討してほしい。

【委員】

- 見直しに当たって、多分組織替えもされると思うが、委員会の議論の中に関係者およびその周辺の者以外に、全く関係のない者の視点、例えば徹底して経営だけを考える人の発想を学芸・総務以外に入れてほしい。美術館マネジメントを超えたものをお願いする。

【事務局】

- さきほどの指摘の中に、「びわこ文化公園都市」をどうしていくのかということであったと思うが、県も立命、龍谷大学が学部の再編で外に出ていくという話も出てきて、我々も危機感を持っている。「びわこ文化公園都市」そのものをどうするのか考え直すことにしており、美術館、図書館、大学関係などの都市内の住居人や外部の方にも入ってもらい、今年から議論を始めている。今のご指摘も大事にしていきたい。

【委員】

○最後に番外編として、「夏本番家族そろって節電クールライフを楽しもう」というチラシが各学校に配布され、夜は水辺、昼間は美術館や博物館に行こうとなっているが、一見良い発想のように思うが、先ほどからの「美の滋賀」の議論とは相いれないように思う。美術館や博物館は涼みに行くための場所なのか、私はちょっと違和感を覚えるが。文化振興課も承知していることなのか。

【事務局】

○そうである。近畿の中でも、京都や和歌山で実施されている。